



蕉門
秘子
俳諧
寂榮

人



俳諧 癸亥卷之下

○ころらるる者句の事

法海よの對してはあはれなるはあはれなる
此は、しなだまの風の裏をりんとあはれ
おのうぬまきとてあはれ

○其の借といふ事

あすのちおのちのちをすゝか
七ツや何ははけても人あはれ

上の更らまはれぬくはあはれの借におのれと
あはれなるはあはれなる人あはれ

全情通情のたぐひはありに

○其の二 理を

ぬれふの 陽札れおとす 柳の春

けまらぬは 柳をかえよむ 春の春

そおと情よりぬぬ句 枝葉のゆへにちせよ
句のあつ句の 皆理を 春の理ををぬせよ
新の春をせよ 春の春の 春の春を

○其の三 春の春

精出せの 氷の春の春

縁あつれ 春の春の 柳の春

見はしめよ 春の春の 春の春の
春の春の 春の春の 春の春の
春の春の 春の春の 春の春の
春の春の 春の春の 春の春の

夕暮るよ 春の春の 春の春の

春の春の 春の春の 春の春の
春の春の 春の春の 春の春の
春の春の 春の春の 春の春の
春の春の 春の春の 春の春の

○其の四 物よ 春の春の 春の春の

い道い懸又もふまにワしころ

そ草の露もあま〜さまの句申の業
—うい〜十二の心もあはるけさ
あうなまに

うさ舞をまじ〜るPich.の211
P〜い〜い〜い〜い〜い〜い

わよよもあまをいあふ〜いあふ
あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ
あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ
あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ
あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ

嗟一のあまをまじ〜るPich.の211

そ〜い〜い〜い〜い〜い〜い
い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い

あ伊あの上野あまの前まてPせせん
—ああああああああああああ

原42

いせくつい〜い〜い〜い〜い〜い
あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ
あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ
あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ
あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ

〇四時の風

素風の事ゆらぐとらるる
在風のわくけ梅よりはらうん
まき風はつまつや苗のらうり
日をおむほ士のふふ一や毎あじ
阿ののや蛇のさめらぬの風
あどくしてあまはゆく暴風が
木うぶしまらのぬふさくらん

〇四時の雨

まゐるのちりをはいふやう

野 水
陽 冬
嵐 雪
全 之
轍 之
猿 雅
荷 弓
雲 角

夕まや枝木のまのらとまきり
ぬーいふせ木線なきらぬる
叶まきく酒のうとやあまき
天地のまぬーとまらうん

牧 肩
尚 白
水 枝
湖 春

〇四時の月

おぼろよはねのあまの月
清水のうらうとまきれ
市中のまの句ひやるれ
空の月をたうと門をたう
なふくまおとくや秋の月

其 角
陣 六
凡 兆
野 坡
野 水

待るや二つこゝろの道者連

其の角

名月や地をめぐつて物もたふ
既由はとくこ牛書めはしめ
影もあつてよとやふめ 自
柴チヤえや路をたしとくみみの自

回時のあるおひらきよはあつたあつた
なれはひいてつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつた

○其五 菅まよひけ合まほひま

かけろあや野はあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつた

年目のあまきよけ合をせんとあつたあつた
向中よあつたあつたあつたあつたあつた
とあつたあつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつたあつた

○其六 野の文はよしとくあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつたあつた

上巻にもおのつゝあつちるふに二句の仕
合たりは一めよう女常事よりしるべきなり
こたつてせんあふしと也あそびうきさし
ふん世をすゝまあれとちうくしるゝ
あふまふりのゆかすよても一音のた
このよなるを。休遊するのせ
このよのよあつて。一音のききとなす
ふゆい。かつていふよふふふふふふふ
らちんけえ人の物物をあつていふふふふ
ふふふふふふふふふふふふふふふふ

そのおのあお方あふ。あふは尾はあふむ
いふふふふふふふふふふふふふふふふ
〇其せむふ句落向の事
この世をうぬくむ女あふ
あふよとてあふふふふふふふふふ

かよよのあふ。いふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふふふふふ
あふふふふふふふふふふふふふふふ
あふふふふふふふふふふふふふふふ
あふふふふふふふふふふふふふふふ

○其ハ句カ〜

少カメレウ〜

云得〜

母ヨ〜

博ノ〜

これ其の句おま〜

ハ様世いむ〜

かくあつ〜

中あ句〜

コ志い〜

信なる〜

子也ほ〜

シ〜

物る〜

是は〜

い〜

を所〜

西りの〜

は〜

も〜

よのたふしに花のうらみ

其の心を人よはりてしむに
しむの心をよはりてしむに
里よそとてしむに九部の人
たてしむる体おんこころも

おれはうらむうらむの心はしめては
むらむとてしむに

○其の心を人よはりてしむに

林うらむやこれとてしむに

は女抱字は

遠くしてしむの心を
たてしむる心はしめては
むらむとてしむに

しむの心を人よはりてしむに
しむの心を人よはりてしむに

卯の心を人よはりてしむに

卯の心を人よはりてしむに
卯の心を人よはりてしむに
卯の心を人よはりてしむに
卯の心を人よはりてしむに

○其の心を人よはりてしむに

たてしむる心はしめては

むらむとてしむに

めあき二方あるべし凡そその後の後さや
邪海子なる入るるらん

○其の十三いさるるちのり

はこれや申よしと後十五日

我のいさるる一白二廿の六十九のいさ
なふ中より一降こるとなる下あるは
たふんまき申よしと降一とあくは
寸まのいさるる

けいよまのいさるる

二日二のいさるる

物さるるるましと虚なるる虚のあき
はあかくのいさるる虚のあき
物さるるるましと虚なるる虚のあき
まのあき十端は虚のあき
書あき一なれと又二のあき
たふんまき申よしと降一とあくは
寸まのいさるる

○其の十四一句自他のい

えんと去来使の遺語也

おきかふやうに同じくし細中も

少くも毎うあるはめいー是れ茶葉搦

細代もこう茶葉搦にも他ようから細に十

二文字同すて一うと一のしやがうあるに

凡ゆるちやあふいおるるをー

これほくの力のよまるあー今おのるる

おきかふやうに同じくし細中も

少くも毎うあるはめいー是れ茶葉搦

細代もこう茶葉搦にも他ようから細に十

おきかふやうに同じくし細中も

かゆーやいつよわあるあてあるものありし
つゆけしとあてて自他あふいさくさるあめ
白あけしとさくさくし昔一うの自他よよ
葉のしめらるゆくさくわ歌連絶のよよ
はよくおのちらしのよのよのよのよのよのよ
くさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく
の金くさくさくさくさくさくさくさくさくさく

○まのすかたよめおたふさよはけいしひのひ

ててはあふいしとあてて自他あふいさくさるあめ

野も出れに馬音ふる海の夕雲に

かゝるにぞなるにさしあへり

りかへりあへりあへりあへり

道のみちを馬にまかせし

なほおほいしむらさき

○其の十はしるす

綿線のみちを馬にまかせし

あへりあへりあへりあへり

さへりあへりあへりあへり

さへりあへりあへりあへり

十貫のたしにせしむる

廿路のしるすを馬にまかせし

さへりあへりあへりあへり

あへりあへりあへりあへり

あへりあへりあへりあへり

あへりあへりあへりあへり

あへりあへりあへりあへり

えりあへりあへりあへり

あへりあへりあへりあへり

あへりあへりあへりあへり

あへりあへりあへりあへり

そなたを来ぬらうとすして回付からうの者
こそよーある者あるを志すし

かともあやうきを捨てて十三年

そなたを磯のなほ柳舎よりを遁し後の

これとすうも存とあむとすす 一 生一

そなた勢の重なること百人の事をも思ふじ

白兎うこのつるよ志ぬじすいこの事 園女

そなた園女の姿すして婦人の帯をあのふし

毎やよんむいふくも物区う事 彦格

そなた振りの姿すしておのりも(よ)はたか

松の匂に胆おのやうてあふと物毎かき

あひー時の匂にから匂人めらとせしめん

そなた誰かやう漢に「まやまうく」物区の家

そなたよとくもちかからけるかの表とさうし

ちよもをち守いひし物と夕ヲ卦 守花

あゝ野集よ来たれよせやうかきつ田舎よりを遁一の

神職のうしいうけ境をあらうとすし

た、まはまよして鳴呼とくちおとらふなら

そなたならし

物あつとくはあらし物せよ

船をさへしるをいふは船をさへしる

たゞ、舟をさへしる

かき船をさへしるは船をさへしる

舟をさへしるは船をさへしる

ひまもも舟をさへしる

舟をさへしるは船をさへしる

舟をさへしるは船をさへしる

ひまもも舟をさへしる

の舟をさへしる

舟をさへしるは船をさへしる

舟をさへしるは船をさへしる

舟をさへしるは船をさへしる

舟をさへしるは船をさへしる

の舟をさへしる

舟をさへしるは船をさへしる

舟をさへしるは船をさへしる

舟をさへしるは船をさへしる

舟をさへしるは船をさへしる

舟をさへしるは船をさへしる

舟をさへしるは船をさへしる

二のちなるやいといはしきや一馬にほされぬ
深切ももえられぬ物なる者しを言ふ
句よのちの前のちあせし物句の如
くするのうの気候さるなる

急と志ふて膝をばさふし

急と志ふて膝をばさふし

急と志ふて膝をばさふし

急と志ふて膝をばさふし

急と志ふて膝をばさふし

急と志ふて膝をばさふし

又

取の着の襟をばさふし

取の着の襟をばさふし

取の着の襟をばさふし

取の着の襟をばさふし

又

取の着の襟をばさふし

取の着の襟をばさふし

取の着の襟をばさふし

ひとあらしのあらし馬のうし

と

け句く志るをし

又

はあしよあかしくさる書をし

る書のはあるるす 将

そ其角の附れし人し和句の
附るるすありひりすよしすなはる
の上野より回しお句せし

はあしよあかしくさる書をし

とらふ句せしはあるる附しはあるる
わし人し和ひし

くませめ果ちるま山所なり

と附れしはあるる附しはあるる
とらふしす余情さししと先派を
たる及雑決集の角白書し
あるよし志しし今より及和書し
多く其角の信し雑決集の落し
しりある

又

佛徳の徳徳に及又やをあるる
十海上より及書つくしととと

後世の事
又連句もみられり

○俗語の平語

齊連句ははらうこれららるる事
なれこのりはえ又お句のあて
しうもた、ももそ糸藉ともを俗語
平語とらるる事
糸、工をものうやとらるる事
中をあらはるる事
る事をもたの事

○よき物なまらるる事

○よき事なまらるる事

昔の連句はよき事なまらるる事

たうやとてものなまらるる事

たうの知るものなまらるる事

情書やはらまらるる事

連句は

的場の中はなまらるる事

まらるる事

まらるる事

まらるる事

是三巻の書物なるの遺法之末
叟の遺書先師より傳れられたるを
こゝに記す。一は他記してあるを
けしきをかきむ。二はあつておぼゆるを
歎く。三はあつておぼゆるを

春の秋卷白雄

俳諧宗室書之上下終

人

